論文の内容の要旨

論文題目　近代日本の視覚メディアをめぐる「教育」と「娯楽」の関係史
―戦前期社会教育のメディア文化史的研究―

氏 名　青山 貴子

（1）研究の目的

本論の目的は、近代日本における「教育」と「娯楽」の関わりをメディア文化史的視点から分析することで、社会教育の多様な歴史的側面を浮かび上がらせることにある。

これまでの教育史研究において、教育主体と客体を媒介するものとしての「メディア」への注目は、学校教育研究においては教科書研究、教材研究から一定の知見が蓄積されているものの十分とはいえず、また社会教育研究においては学校以外の社会における広範な事象を範疇とするために、教育環境・物的条件と教育理念との相互規定関係に関するメディア論的考察が研究の俎上に載せられることが少なかった。

一方で、文化社会学の分野におけるメディア史研究では、「メディア」を単に送り手から受け手への意味の伝達としてではなく、「相互主観的な関係の中で意味が成立していく場」（吉見俊哉）として捉え、人々の空間認識、時間認識、思考法などに深く影響を与えるものという観点から考察が重ねられている。このようなメディア概念に基づいた歴史考証は社会教育史研究においても重要であると思われる。特に「遊び」や「娯楽」として捉えられてきた様々な事物を上記のメディア概念から捉え返すことは、多様な文化的諸相を反映した社会教育の特質を浮かび上がらせ、「国家」対「民衆」という二項対立構造で戦前社会教育を捉えてきた歴史観に再考

を促すものと考える。

以上の問題意識に基づき、本論では明治初頭から昭和初期（1920 年代）までを対象とし、錦絵・幻灯・双六絵・活動写真などを「教育」と「娯楽」を架橋する視覚メディアとして例証的に取り上げながら、学校内外において娯楽や教育をめぐる諸活動が個々の視覚メディアを通じてどのように展開し、結果として「教育」や「娯楽」といった概念がどのように相補的に醸成されてきたのかを考察するとともに、教育の近代化過程でそれら視覚メディアに付与された「近代性」がどのような「近代的国民像」を希求し、個々のメディアの布置を促すことになったのかを検討した。

（２）研究対象と分析課題

本論文では分析対象とするメディアとして錦絵（掛図、教育錦絵、双六絵）、幻灯、活動写真を取り上げた。これらを考察対象に選定した理由は、①国家がこれらのメディアを「視覚の近代化」の観点から教育施策に積極的に取り込んでいく動きが見られるとともに、②「娯楽」との関わりから近代社会教育概念の成立に深く影響を及ぼしていると考えられるからである。

なお、論文全体を通じて、①図像分析を通じた通俗教育史の再検討、②「教育」概念を所与のものとする歴史観の再検討、③国家による民衆統制という一方向的歴史観の再検討、の３点を分析課題に設定して考察を展開した。

（３）考察の内容

〈第１部〉では、明治国家による教育の近代化政策が、視覚に訴える様々なメディアのなかでどのように表象されてきたのかを検討した。具体的には明治初期に発行された文部省発行教育錦絵に注目し、従来の制度史や文献研究のみからは捉え切れなかった、近代日本における社会教育概念の成立前期の状況を明らかにすることを試みた。

第１章では、文部省発行教育錦絵を学校外の視覚教育メディアと位置づけ、内容および基本的性格を整理した。その結果、多岐にわたる教育錦絵の画題は知識的内容および道徳的内容に関して伝統・開化の両側面の特徴をもち、明治揺籃期の複合的な教育視点が表象されたものであることが示された。

第２章では、教育錦絵の制作に関わりの深い人物の教育思想を検討することで、教育錦絵のもつ性格を掘り下げた。ここでは、教育錦絵発行の背景に田中不二麿の幼児教育思想があることを指摘し、幼児教育政策における教育錦絵の位置づけを確認した。続いて、教育錦絵の図像の部分的典拠となった啓蒙書『西国立志篇』を手がけた中村正直を取り上げ、典拠部分の図像分析を通じて、教育錦絵の女性表現に中村正直の女性教育観が反映されていることを示した。

第３章では、文部省発行教育錦絵のなかの〈教訓道徳図〉に焦点を絞り、学校用修身教科書・

修身掛図・教育幻灯との比較考察を通じ、学校内外における徳育メディア政策の変遷を追う試みをした。ここでは同時に、〈教訓道徳図〉と明治中期の学校用修身掛図の図像を比較することで、道徳教育の教育主体として「おとな」がどのような存在として期待されているかについても考察した。

第 4 章では、教育錦絵の受容プロセスを博覧会・博物館における教育品の展示状況から探っていった。ここでは、初期府県博覧会では希薄であった「教育」というカテゴリが、5 回にわたる内国勧業博覧会および教育博物館の展示のなかで徐々に整備・体系化されていったことが明らかになった。「教育」というカテゴリに分類された教育品の展示は、人々に当時の具体的な教育内容や個々の教育理念のみならず、近代社会にふさわしい教育とは何か（＝〈教育〉概念）を普及させる役割を果たしていたのであった。

〈第 2 部〉では、教育政策とは離れたところで発生してきた民衆娯楽として双六絵、写し絵、活動写真などに焦点を当て、そこにどのような教育的まなざしが注がれるようになったのかをみてゆくことで、視覚メディアをめぐる「教育」と「娯楽」の相克のあり様を描出することを目指した。

第 5 章では、明治期に子どもの娯楽として広く親しまれていた教育双六を取り上げ、双六という遊戯のもつ特質＝「振り出し」から「上がり」への移動を競うという娯楽的特質と、双六に描かれた教育的主題とが結びつくことで、人々が双六というメディアを受容するコンテクストがどのように変化していったのかを探った。具体的には、出世双六の表象と『穎才新誌』の言説とを比較し、作文（文字メディア）と双六（遊戯・図像メディア）とで、立身出世をめぐるメディア受容のコンテクストの相違を検討した。その結果、『穎才新誌』が初期の抽象的な立身出世主義への傾倒を示す言説から、しだいに受験生活のハウツー、自己分析、挫折観や苦悩の共有といった内容にシフトしていったのに対し、出世双六は一貫して抽象的な出世観を表象し続け、同じ立身出世を鼓舞するメディアと捉えられるにも関わらず、両者の内容には「ズレ」が生じるようになったことが明らかとなった。

第 6 章および第 7 章では、写し絵、幻灯、活動写真といった戦前期の映像メディアの変遷を追う中で、それらの位置づけをめぐる議論が近代的な民衆娯楽論、社会教育論を精緻化させていった様子を確認した。ここでは、娯楽による風紀の乱れを矯正しようとする「娯楽の教育化」の動きと、娯楽を利用した通俗的な教育を目論む「教育の娯楽化」の動きとが混在しながら、両者をめぐる議論の中で、その後の社会教育行政に連なる「娯楽」概念および「教育」概念が醸成されてきたことを確認した。

第 8 章では、活動写真（無声映画）を「語り」で解説する活動弁士に着目し、彼らの社会的位置づけや語られた内容の分析を通じて、大正期に活動写真の〈声〉を担う存在として活躍した弁士に関する言説分析を行い、「近世的」な〈声〉としてスタートした弁士の語りが、国家や

社会からどのように「近代的」な〈声〉を要請されることになったのかを検討した。その結果、娯楽と教育とではその近代化を求める視点にズレがあり、そのズレが弁士への「近代的」な〈声〉への要請にも異なるかたちで表出していたことを示した。

（４）結論

近代日本の視覚メディアをめぐる「教育」と「娯楽」の関係構造をまとめるならば、その特徴は以下の３点に整理できる。

１点目は、明治初期において「娯楽」および「教育」の概念は渾然一体とした状態にあったが、政府によって視覚メディアの通俗教育的効果が注目され、「近代化」の名の下に「教育的要素」と「娯楽的要素」が意図的に結びつけられるようになった点である。明治初期には学校内外で使用された教育教材が娯楽的要素を含む絵図と結びつけられ、「視覚教育メディア」ともいうべき絵解き教材が生み出された。ただしこの時期において、それらの絵解き教材は錦絵の娯楽的要素を表層的に取り入れたものにすぎず、飽くまで教育教材としての枠内で制作・受容されたものであった。

２点目は、明治後期～大正期にかけては娯楽のもつ本質（遊戯性・気晴らし性）に教育的要素を内在させ、教育的効果をもつ（とされる）娯楽そのものを社会教育に内包していくなかで、その是非や功罪をめぐる議論を通じて、近代的な社会教育概念および民衆娯楽概念が醸成されてきたという点である。これは娯楽を対照としながら社会教育概念の近代化が図られたことを示すものである。

３点目は、上記のように娯楽の本質に教育性を内包させようとしたがゆえに、大正期に民衆娯楽が確立して以降は両者にしばしば亀裂が生じることとなったが、こうした「教育的視点からの娯楽の統制」は、単純な「国家による民衆の統制」としては帰結しなかったという点である。出世双六や弁士の〈声〉にみる「ズレ」の構造は、「国家」と「民衆」、もしくは「教育」と「娯楽」の関係が単純な統制・被統制構造ではなく、それぞれの思惑がズレをもちつつメディアを編成していこうとする力学の中で、両者は動的な「調停関係」にあったといえる。

以上、本論では近代国家がいかに娯楽を通じて民衆を教化しようとしてきたのかについて、視覚メディアを切断面として描出することを試みた。そこでは「教育」と「娯楽」が視覚メディアを通じて出会い、お互いを精緻化させながら、両者がズレを孕みつつメディアを再編成していく動的な調停関係にあった過程が明らかにされた。